

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有  
〒207-0015  
東京都東大和市中央 1-539-15  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

# 東北再興

Re-Create, TOHOKU!

2022年(令和4年)5月16日 月曜日

無料

## 第120号

毎月発行

発行 2022年(令和4年)5月16日 月曜日

### 【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

#### 【砂越 豊】

宮城県生まれ、68歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の大崎上映会は延期。新型コロナウイルス禍を乗り越え、4作目制作に向けて歴史・文化研究を掘り起こすことを標榜。



## 当新聞発刊11年目突入記念号 ウクライナ問題は世界激変の引き金になる 同時に【東北再興】の大きなチャンスも到来する シリーズ【東北再興のための新産業創出】 第2回

新聞発行満十周年号にふさわしいトップ記事

今回は記念すべき第百二十号。月刊で発行してきて、一度も休まず発行してきた。したがって今回号まででちょうど満十周年、今回号以降から十一年目に突入することになる。よく十年ひと昔というが、一区切りついた印象もあり、また長い道のりと感じつつも、あっとい間だったとの感もある。小規模新聞ながらも、発行責任者としてはまことにうれしい限りである。これもひとえに、寄稿者の方々と読者の方々の絶大な応援の賜物と感謝申し上げたい。そんなことで当新聞も、十一年目以降も東北再興のためにさらに奮闘していきたいと思う。幸いなことに、百二十号のトップ紙面にふさわしい、東北を一変させるような一連の出来事が世界で進行中であると考えているので、

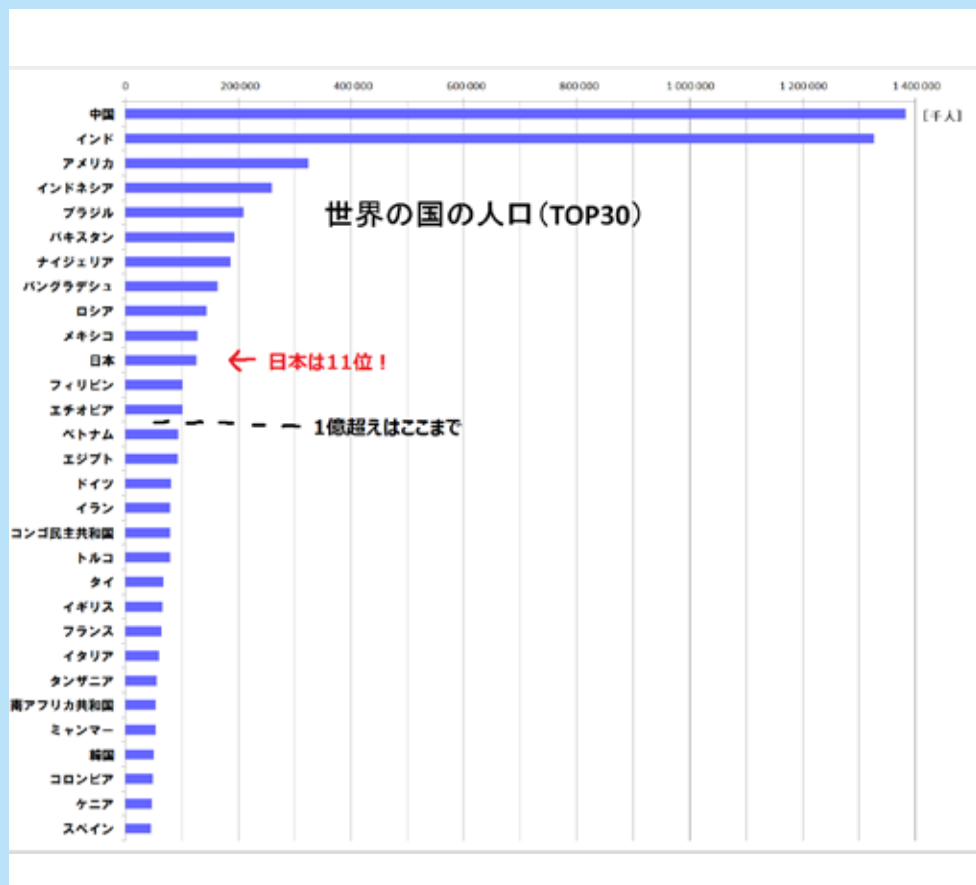
それを取り上げたい。しかもその一連の世界の出来事というのは、東北が一丸となって真剣に取り組めば、本格的な【東北再興】のきっかけを作ってくれるかもしれない出来事でもあると思う。それで、今回は、具体的な【東北再興のための新産業創出】論議をより分かりやすくするための前段階として、東北を取り囲む、世界の環境や状況分析をまず取り上げたいと思う。東北が最初から登場しない「前段」が大分長くなるが、ぜひお付き合い願いたい。

その兆候としてまず挙げられるのが、いままでは中国語で忙しかつたヨーロッパ、日本など見向きもしなかったヨーロッパ各国の首脳たちが毎日入れ替わるように次々に訪日し、首脳会談を開催していることだ。今年四月以降だけでも、スイス、ニュージーランド、ドイツ、EU、フィンランド、アメリカはこれからだが、各国首脳が訪日している。日本からも、このコロナ禍のなかでG7にわざわざ出かけ、あるいはリモート会議も頻繁に行われている。併せてその他の国々も積極的な外交を行っている。さらには、ヨーロッパやアメリカなど三十か国が参加する軍事防衛機構であるNATO―北大西洋条約機構

激変する世界がスター  
トしようとしている  
さて、前号から始まったシリーズ【東北再興のための新産業創出】の開始宣言で言い足りなかったことで



突然、世界全体が流動化してきた？



国別人口ランキング

にオプザーバー参加までしている。  
この顔つき合わせての国際会議の頻度は素人目にも異様である。ウクライナ問題以外にも何か起きていと思うのが自然だ。  
ウクライナが直面している目先の対応だけを話し合うなら、わざわざ日本から遠くまで頻繁に出かけたり、日本に來なくても済むのに、なぜだろうか？  
世界地図を眺めて、その激しい動きを想像してみると分かりやすい。まさに「グローバルでダイナミックなうごめき」を感じられるだろう。

何か、世界の次のステージ、従来とは大きく異なる変貌する世界の枠組みをにらんで、各国がどう対応していくのかについて、真剣に話し合っているとしたか思えない。  
マスメディアには、表面はウクライナ問題対応という説明に終始し、実際に話し合われている「極秘事項」は完全に秘したままでいるように思えてならないのだ。  
**目先の変化はどこから始まる？**  
はつきりしていることは、ロシアのウクライナ侵攻に

よって、圧倒的と思われていたロシアの軍事的な存在感は砂上の楼閣となったことだ。そのことは、多くの日本の防衛専門家も指摘している。  
つまり、ロシアが短期間で終結するはずだと思っていたウクライナ侵攻なのに、ウクライナ側の思わぬ反撃によって逆に「ロシアは軍事的に弱い」ことを世界に知らしめてしまったのだ。  
そして、時代遅れの戦術も明るみに出た。「ロシアの軍隊はいつたい、いつの時代を生きているのか？」  
追い詰められたロシアだ

から、禁断の核兵器も使うかもしれないというのだが、もし核兵器使用が現実となったら、もはやロシアは完全に世界から孤立する。  
最悪の場合は、国の消滅も覚悟しなければならぬ可能性まで出てくるのではないか。  
そもそもいかにしても、近未来的に、ロシアの存在感が今後大きく後退していくのは確実である。  
今後ロシアから調達しなくなる小麦と燃料の不足は、どんなに遅くとも一年後あたりまでにはすべて代替え分調達で解決するだろう。  
これらの一連のことから、世界の超大国のバランスが一挙に崩れたと見るのはどうであろうか？  
さらには、ロシアに追いついて見ると中国やインドその他の国々は、「新たな世界の枠組み」から徐々に排除されていく流れになるのではないか？  
いわゆる西側、つまり「自由で民主的な社会を標榜する資本主義国家連合」という強力な枠組みがより明確になり、そうでない国々との明確な「壁」を形成するのではないかと、まったく機能不全に陥っている「国連」の代わりに。

素人の幻想にすぎない、考え過ぎだといわれるかもしれないが、「二十一世紀の新たな二極化」が出現するのではないかと思うのだ。

**大人口を抱える中国の成長は止まる？**  
ウクライナ侵攻までは、中国やインドなどの人口大国において、その巨大な人口を背景にした巨大な消費が期待されるので、世界中から多くの投資と企業呼び込んできた。  
しかし、これも大きく変貌する可能性があるのではないか？  
巨大な人口だけが、世界の投資を呼び込んでいたのではない。そこは、世界に開かれていて、「自由で民主的な社会を標榜する」という理念が共有されなければならなかったはずだ。  
それが、ウクライナ侵攻を正当化するロシアを支持する中国やインドとなれば、前提条件が違ってくる。  
「人口大国消費」は喉から手が出るほど欲しいが、「自由で民主的な社会を標榜する」ことが共有できないならば、あきらめざるを得ないと方針転換したらどうなるか？  
もしも、現在、交流を活性化している先進諸国同士が、価値観を共有できない「人口大国—巨大消費国」とは今後投資も、企業進出も徐々に減少させると決めたら、世界はどうなるか？  
世界各国のGDPランキングを見てみよ。中国を除けば、G7各国が上位を占めている。  
もう「理念」を共有できない人口大国を頼らずに、



お金持ち国だけでやっている、行けるはずだとすれば、世界の枠組みは確実に変わるのだ。  
そこから世界の製造と消費の基本構造が大きく変化していくことは十分にあり得ることだと思おうのである。そのうえで、従来の製造拠点と消費拠点が大きく減少していく部分を各国で分担して行こうという企みが現在進行形で話し合われているとしたら、大変なことである、日本も、東北も激変に身構えなければならぬ。表面上のウクライナ侵攻問題だけ見ていては、やりしついでと大變な目に遭う。  
新たな事態が突如として出現して大慌てすることのないように事態の変化をみき

わめなければならぬ。  
筆者はこの流れは確実にやってくると思っている。  
前述の「自由で民主的な社会を標榜する資本主義国家連合」の中では、さまざまな意味での「安全保障」が基本となるだろう。  
軍事・防衛はもちろん、産業になくてはならない半導体産業においても、その他の製造業分野においても、食糧分野においても、水産資源分野においても、資源開発においても、エネルギー分野においても、「安全保障」が厳密に管理され、機

れることにより神経質になり、場合によっては報復もありうる。  
他方、これまでは途上国支援という名目で、さまざまな情報が途上国に開示され、途上国産業に活用できたものが、より厳格に見直されることになる可能性があるとも考える。  
そうした情報が欲しければ「価値観を共有せよ！」と踏み絵を踏まされる。非常にギスギスした二極化世界になる可能性がある。  
**今後の【東北再興】はこの新たな枠組みで**  
日本の、もちろん東北もこうした変化を先取りしていかないと乗り遅れる。もし東北が乗り遅れるよ

うなことがあれば、この数百年でだらだらと衰退していった流れは止まることにならないだろう。それどころかさらに衰退に拍車がかかるだろう。  
こうした観点から、【東北再興】のための、「新エネルギー開発」、「食糧安全保障」、「人口増大関連産業」、「新通信システム」、「新防衛産業」、「新防災産業」を次号以降で検討してみることしようと思う。  
その際には、日本という枠組みも飛び越えなければならぬかもしれない。  
単なるグローバル思考というのではなく、東北単独でも世界で動いていくという含むという意味である。



## 第93回

### 水産業再興のための料理レシピ紹介

#### 《さんまの蒲焼》

身を開いたら、火が通りやすい魚です(松本談)



郷土料理愛好家  
松本由美子氏

**材料:** さんま 1尾、みりん 大3、しょうゆ 大2、酒 大1、砂糖 少々

**料理方法:** ① みりん、酒は鍋に入れてアルコールを飛ばします。② しょうゆを入れ、沸騰させて煮詰めます。③ さんまを開き、水気を拭いて煮詰めたタレに浸します。④ 小麦粉をまぶして、フライパンに油をしいて、さんまを焼きます。⑤ 裏、表を中火で焼いて弱火にし、じっくり焼きます。⑥ 完成したら、器にのせ同じタレをサッとかけます。

## 活躍する東北スポーツ選手】②

### 前号に続いての東北出身スポーツ選手の一端をご紹介します これらの選手たちの活躍を忘れてはいけませんね

前号で紹介した東北出身の著名なスポーツ選手はもつともつといます。そのなかでも、特に世界に名をとどろかせ続ける選手たち、かつて世界で活躍した選手たちを忘れては片手落ちです。彼らに触れておかないと、東北のことを中途半端にしか知らないとお叱りを受けそうなので、今回号で追加しておきます。

\* まずはスケートから「羽生結弦選手」。冬季オリンピック連覇の偉業は歴史に残るでしょう。次のオリンピックにはぜひ出場して欲しいものですが、他方、大変なプレッシャーと心労がさらに続くことを考えると出場を望むのはどうかとも思うのです。心情からいえばゆっくり休ませてあげたい。

彼の活躍により、東日本大震災はいつまでも世界中の人々から忘れ去られることがありません。同じく冬季オリンピックのスケートで金メダリストの「荒川静香選手」。もう引退して解説者となつていますが、あのイナバウアーはすごかったですね。いまあの演技を行う選手を見かけるたびに荒川選手のことを思い出します。

オリンピックの女子レスリングで三連覇の偉業を打ち立てた「伊調馨選手」もすごい。何とか五連覇をかけて出場させてやりたかつたですね。オリンピック史上で五連覇を達成したら、もう神様の領域です。日本の女子レスリング界も何だか意地悪でした。なぜ応援してやらずに、世界の偉業である五連覇の邪魔をするようなことをしたんでしょね。仮に達成できなかったとしてもそれにチャレンジできるだけでもすごいことなのに、とても残念でした。それから、前回のアメリカ大リーグで紹介すべき選手を忘れていました。



伊調馨選手



羽生結弦選手



菊池雄星選手



荒川静香選手

「菊池雄星投手」です。大谷選手の影に隠れてしまっているようですが、若手の高校の先輩でもあります。先日のニューヨークヤンキースでのピッチングはまことに見事でした。

# 「想定外」をいかになくすか

## 「津波浸水想定」とは

今回も地震の話である。五月一日に宮城県が「津波浸水想定」を公表した。「津波浸水想定」というのは、東日本大震災を受けて二〇一一年一二年に施行された「津波防災地域づくりに関する法律」の中で定められているものである。

この法律は、将来起こりうる最大クラスの津波災害の防止・軽減のため、全国で活用可能な制度を創設することを目的に制定された。その中で都道府県は、津波による災害の発生のおそれがある沿岸の陸域と海域に関する地形、地質、土地利用の状況その他の事項に関する基礎調査を実施し、都道府県知事はその基礎調査の結果を踏まえてこの「津波浸水想定」、すなわち津波があった場合に想定される浸水の区域と水深を設定して公表することが義務付けられている。そしてこの

「津波浸水想定」は「最大クラスの津波」を想定して設定されることになっている。なお、青森県は昨年五月に、岩手県は今年三月に、福島県は二〇一九年三月にそれぞれ公表している。これで東北の太平洋岸の四県の津波浸水想定が出揃ったことになる。ちなみに、秋田県は二〇二〇年一月、山形県は二〇一六年三月に公表している。今回の宮城県の公表は、東北六県の中で最も遅かったことになる。

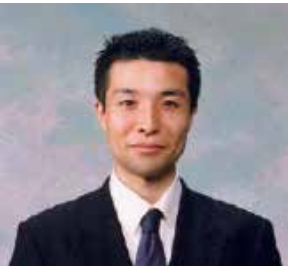
## 驚べきその中身

公表された「津波浸水想定」は各方面に驚きを持って受け止められた。その想定は、かの東日本大震災での被害をさらに上回るものだったからである。今回の宮城県の津波浸水想定では、予想される浸水面積は、県内のほとんどの地点で東日本大震災時を上

回る結果となった。具体的に挙げれば、松島町の東日本大震災時の浸水面積は湾内の島々が天然の防波堤となったこともあって二平方キロメートルにとどまったが、今回の津波浸水想定では六平方キロメートルと実に三倍の値となったのを始め、多賀城市は東日本大震災時の浸水面積が六平方キロメートルだったのが今回の津波浸水想定では一一・二平方キロメートル、女川町では三平方キロメートルだったのが六・二平方キロメートルと、それぞれ二倍前後の数値に、気仙沼市では東日本大震災時の浸水面積が一八平方キロメートルだったのに対して、今回の想定では二五・六平方キロメートル、南三陸町では同じく一〇平方キロメートルだったのが一三・八平方キロメートルと、それぞれ約一・四倍に、石巻市は七三平方キロメートルだったのが八四・九平方キロメートルと、東日本大震災時よりもさらに一二平方キロメートル近くも浸水する想定となった。

## 執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)  
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。  
「東北ブログ」  
http://blog.livedoor.jp/anagnasi/



Facebook  
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

仙台市は一〇・三メートルの想定である。津波到達時間も東日本大震災時よりも早い。石巻市から気仙沼市までの南三陸沿岸地域では、第一波到達時間が二一から二五分、最大波の到達時間も四一から六〇分と、東日本大震災時よりもかなり早い。

## 悪条件が重なった際の想定だが

今回の津波浸水想定が東日本大震災時を上回るものとなったのは、その前提条件が「最大クラスの津波が悪条件下で発生した場合」であるからである。具体的には、①地震発生とともに地盤が沈下(地震モデルによる地盤沈下量を考慮)、②津波発生時の潮位が満潮(朔望平均満潮位)、③津波が越流すると防潮堤が破壊される(防潮堤を津波が越えた場合同時に破壊する)、④三点を「悪条件」としている。

それ以上が重なるとは誰にも断言できない。あの地震の津波をも上回る津波が来ることもあり得るのだと認識しておくことは、次に遭遇した際に「想定外」をなくすために必要不可欠である。

## さらに上もあり得る

さらに言えば、悪条件が重なった場合にこれだけの津波が押し寄せるといふことだが、それではこれが想定される限り最大の津波か、とすると、そうとも断言できない。想定を一〇〇パーセント信じ込んでしまふところに想定外は起こる。前回紹介した通り、今後起きることが予想される地震は、東日本大震災を引き起こした東北地方太平洋沖

地震と同じ震源域の地震の他に、それより北の三陸・日高沖の日本海溝沿いの地震、さらに北の十勝・根室沖の千島海溝沿いの地震がある。今回の津波浸水想定は、各地域においてこれら三つのうち、津波の高さが最も大きい津波を「最大クラスの津波」として設定している。

しかしである。もしこれら三つのうち二つ、あるいは三つ同時に地震が起きたらどうなるか、ということも想定しておかなければならないだろう。東南海トラフ地震ではまさにこうした連動型の地震の発生も想定されている。その「東北版」が起らないとは誰にも言い切れない。

今回の津波浸水想定は東日本大震災をも上回った。しかし、それが上限と決めつけるべきでない。でないと、結局はまた東日本大震災の時と同じ轍を踏むことになる。「想定外」という言葉がまたしても持ち出されてしまふ結果となりかねないのである。

今回の津波浸水想定をどう活かすべきだろうか。津波浸水想定は、津波の被害が想定される地域の人を脅かすためにあるものではない。もちろん、こうした想定を公表することで防災・減災に対する意識を高めてもらうということは期待できるとは思われる。また、都道

府県知事は、津波による人的災害を防止するためとして、警戒避難体制を特に整備すべき土地の区域を「津波災害警戒区域」として、そのうち津波災害から住民の生命・身体を保護するために一定の開発行為及び建築等を制限すべき土地の区域を「津波災害特別警戒区域」として指定することができる。

要は、今回の津波浸水想定を踏まえて自分たちの地域を今後どうつくり、どう津波の被害を減らし、人命を守っていくかという、防災を核に据えた地域づくりの話になっていくのである。一年前の悲劇を二度と繰り返さないために知恵を絞って対策を練る、その対策を「絵に描いた餅」にしたための方策も講じる、今回の津波浸水想定はそのためにこそ活用すべきものである。

となく思い込んである面があるからである。確かに、未曾有の災害であった。しかし、あれ以上がないとは誰にも断言できない。あの地震の津波をも上回る津波が来ることもあり得るのだと認識しておくことは、次に遭遇した際に「想定外」をなくすために必要不可欠である。

仙台市は震災後、沿岸部に津波避難の丘や津波避難タワーを整備した。これらの高さは概ね一〇メートルである。これはまさに東日本大震災の折にこの地を襲った津波の高さに基づいて決められたものである。しかし、先述の通り、今回の津波浸水想定で仙台市に到達する津波の高さはそれを超える一〇・三メートルと算出された。今にして思えば、あの震災時の津波を上回る津波が来るかもしれないとの想定のもとにより余裕を持った高さに設定すべきであったわけである。

地震と同じ震源域の地震の他に、それより北の三陸・日高沖の日本海溝沿いの地震、さらに北の十勝・根室沖の千島海溝沿いの地震がある。今回の津波浸水想定は、各地域においてこれら三つのうち、津波の高さが最も大きい津波を「最大クラスの津波」として設定している。

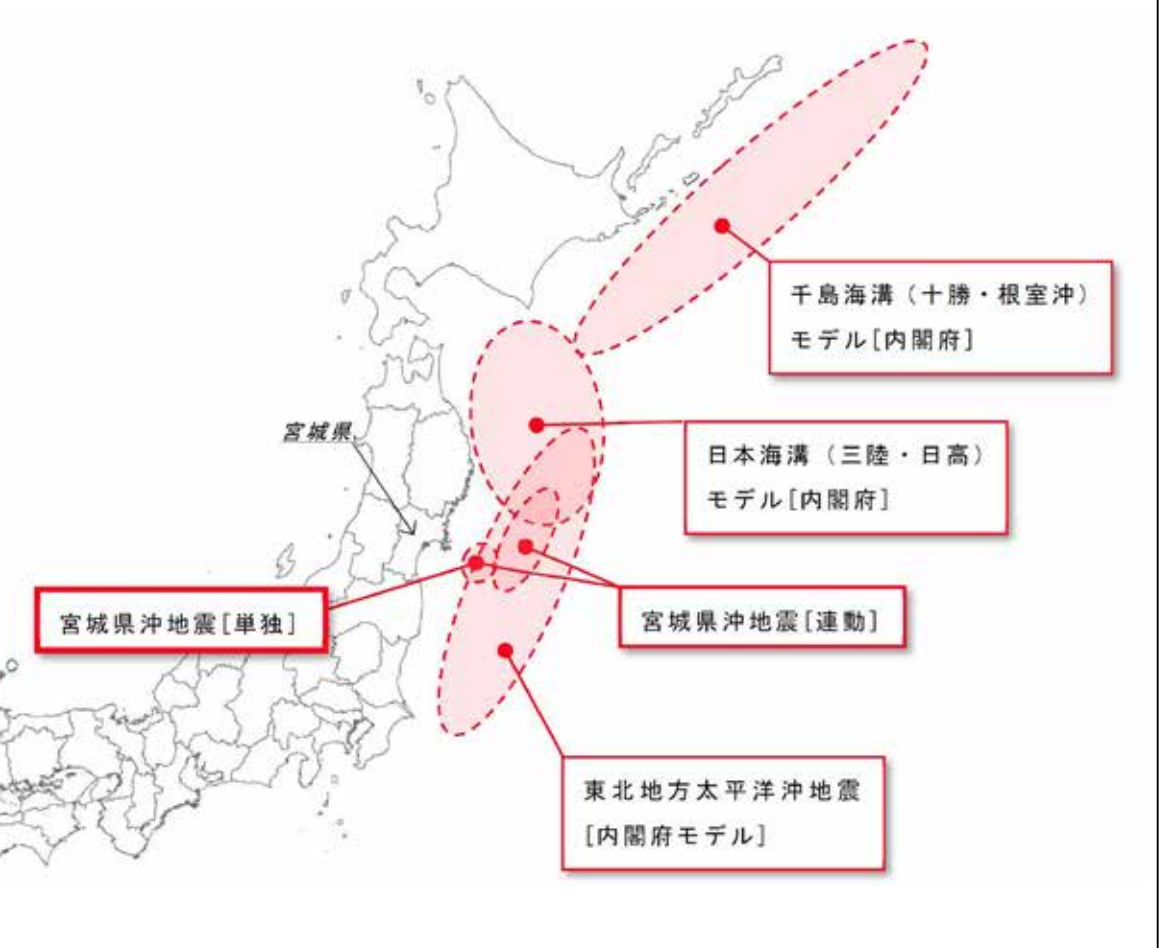
しかしである。もしこれら三つのうち二つ、あるいは三つ同時に地震が起きたらどうなるか、ということも想定しておかなければならないだろう。東南海トラフ地震ではまさにこうした連動型の地震の発生も想定されている。その「東北版」が起らないとは誰にも言い切れない。

今回の津波浸水想定は東日本大震災をも上回った。しかし、それが上限と決めつけるべきでない。でないと、結局はまた東日本大震災の時と同じ轍を踏むことになる。「想定外」という言葉がまたしても持ち出されてしまふ結果となりかねないのである。

今回の津波浸水想定をどう活かすべきだろうか。津波浸水想定は、津波の被害が想定される地域の人を脅かすためにあるものではない。もちろん、こうした想定を公表することで防災・減災に対する意識を高めてもらうということは期待できるとは思われる。また、都道

府県知事は、津波による人的災害を防止するためとして、警戒避難体制を特に整備すべき土地の区域を「津波災害警戒区域」として、そのうち津波災害から住民の生命・身体を保護するために一定の開発行為及び建築等を制限すべき土地の区域を「津波災害特別警戒区域」として指定することができる。

津波浸水想定は、津波による人的災害を防止するためとして、警戒避難体制を特に整備すべき土地の区域を「津波災害警戒区域」として、そのうち津波災害から住民の生命・身体を保護するために一定の開発行為及び建築等を制限すべき土地の区域を「津波災害特別警戒区域」として指定することができる。



# スパルタカスの悲壮は今も— 遠くに想う「仏国浄土」の事

(注: 本文のウクライナ地名表記は旧来のロシア語発音由来を用いています。)

私はウクライナという国に

この国に関する最も古い個人的な接触は、中学生の頃に『戦艦ポチョムキン』の叛乱」というノンフィクション文学と、同テーマの有名な無声映画を知った事であった。二〇世紀初頭・ロシア革命の先駆的事件とされるロシア黒海艦隊の戦艦内における蜂起はウクライナ人水兵を指導者として、ウクライナ港湾都市オデッサからルーマニアに至る黒海沿岸にかけて展開したもので、多感な少年にとつて



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始める東北好きである。

は刺激的な実録であった。続いて、高校時代の一九八六年に起きたチェルノブイリ原発事故の現場が当時のウクライナ・ソビエト社会主義共和国北部だった事に凝り、ドイツ敗戦後にソ連に接収されたコンタックスの技術により造られたコピーモデル、その名もウクライナ首都の名を冠した『キエフ』の古品を所有した事であった。

一連の過去の接触において一貫していたイメージは、「ソ連(ロシア中央集権)の一部」としてのウクライナであった。だが、東京に電力を供給していた原子力発電所の事故被害を被ったのが福島・東北であった事実を忘れ得ようもない者にとつて、ウクライナという地がいかに歴史的にこの東北と共感し得る存在か、はもつと早くに知っておかねばならぬ事であった。

古くからロシア、オーストリアといった周辺の帝国に抑圧されてきたウクライナにとつて、独立は長年の悲願であった。ソ連時代のロシア化政策、粛清、弾圧を乗り越え遂に独立を果たしたが、大ロシアにとつてはもはや長年の身体の一部としか認識できないという事なのだろうか。つい近年、中国が香港の人々に対して行った暴挙との酷似度合に、強い既視感を覚える。一国の独立を否定し、その主張と勢力を抹殺しようとする人間のいかに凶暴である事か、そしてその暴力に抵抗し、独立を守り戦い続けようとする事のいかに難しく、勇気の要るであろう事かと、あらためて思う。

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に

ウクライナ避難や援助に



幻の古代港湾都市国家・カルタゴ (第2ドイツテレビ製作の復元映像より)

世界終末の時に備えるのだと、北歐神話に伝えられてきた。

西洋ならではの、ファンタジックで強烈に魅惑的な話ではあるが、東洋的に形を変えれば戦没者を英霊として特別な境内で祀る日本の国家的な死者の「選別」の姿が浮かび上がるかも知れない。しかし、敵味方に死者を分けて祀るところに、憎しみと、戦争の終わりが見えてくるだろうか。

何故、戦争が起こるのか、これを恒久に終わらせるにはどうしたら良いのか、そう真摯に追究しない心からは、敵味方の差別なく、更には人間か否かの別もなく供養するという現世仏国浄土・平泉の思想は生まれてこないのではないか。

民族の独立を認め、あらゆる差別を止める努力を、全人類が実践する事だ。だがその遠い道の中の、スパルタカスの勇気と闘志の炎もまた、人々の心から消え去る事はないだろう。



遠野は花盛り



遠野は花盛り



遠野は花盛り



遠野は花盛り



遠野は花盛り



ツクシ

今年の春はまことにあわただしい。突如として夏日になったかと思えば、いきなり冬に舞い戻ったりして、衣替えもままならない。体調管理もかなりむずかしい。加えて、コロナ禍は依然としておさまらず、他方、遠方では戦争ありで、心も落ち着かない。心身ともに不良である。

そんなところにたびたび地震などがあると、大きな天変地異の予兆ではないかとの不安も感じてしまうこの頃である。

こうした状況下で、遠野の春の花々を見ると、すつと心が落ち着く。それが本来の世界なのだ教えてくれる気がしてほっとする。

シリーズ 遠野の自然  
**「遠野の立夏」**  
 遠野 1000 景より



サクラ並木 2



早春の不動滝

# “再会”を喜び合った【第44回三陸酒海鮮会】 コロナ禍による2年3か月のブランクを経てようやく再開! 次回以降はさらに被災地との連携を深めた新方式に!

## 長すぎる延期期間

延期前の『三陸酒海鮮会』の開催は実に二年三ヶ月前のことだった。そんなことで、長い延期なんてものじゃなく、ほぼ会の消滅ともいうべき延期期間だった。何度か延期を重ね、以前の常連の参加者の方々はこの会のことをすっかり忘れてしまったのではないかと心配になったのも一度や二度ではない。

コロナ禍が少し落ち着きかけたとき、忘れられていないかの確認も兼ねて、『三陸酒海鮮会』を企画して様子見をしたほどだ。

残念ながら『三陸酒海鮮会』は会場が以前とは違うということもあり、また完全に「コロナ解禁」になった訳でもなかった。参加者は少なかつた。そんなところに、都の条件付きではあったが、「コロナ解禁」となったので、早速再開のための企画をして参加者を募った。

そうしたところ、想像以上の方々に参加表明をしていただき、会場の席確保が大丈夫かと心配するほどだった。そうして四月二十三日、会場は以前と同様の、渋谷の焚火家で、十八名のご参加をいただいて、待ちに待った開催の運びとなった。

## まるで同窓会

久しぶりに集まってみて最初に感じたのは、まるで中学や高校の同窓会のようなこと。 「常連組」の方々は、出身校も出身地域も当然ながら異なるが、足掛け十年の間続けていけば、そうした同窓会のような結びつきが醸成されてきたというのが、もあながち誇張ではない。

読み聞かせが始まるまではワイワイガヤガヤだった宴席が静まり返り、東日本大震災の津波の被災者を思っていたことと、震災で多くの親子が生死を分けたという話は、いっつも聞いている。この読み聞かせで、いつまでも東日本大震災を忘れないで欲しいという主催者の思いが少しでも伝われば幸いである。

## 次回以降は運営方法も変更して再開予定

ところで、この会の会費の税込五千円というのは、最初からお店側に赤字覚悟の運営を強いてきた面は否めない。 コスパ最高といいつつ、参加者だけが恩恵を享受するだけではない。そこに昨今の物価上昇で、さらに赤字幅が拡大するので、これ以上のご負担をかけていくことはできない。

またお店の側からも、『三陸酒海鮮会』が単なる飲み会になってはいないかとの指摘もいただいたので、次回以降は、会の運営方式を思い切って大胆に改革しようということにした。それを参加の皆さんにも伝えた。

どんな会の運営になるかは、今後の打合せによるが、決まっていることは、東北との結びつきをさらに強固にしていこうということ。詳細が決まり次第、紙面でも紹介していく予定。このご期待。

## 東日本大震災関連児童書の読み聞かせ

この会は東日本大震災支援がきっかけで誕生した会であるというのをいつも目立たないように運営して、東北被災地にも、東北にも関係ない人でも気軽に参加できるのを目指してきたが、今回は少し趣向を凝らした。

延期前に秘かにお願いしていた東日本大震災関連児童書の読み聞かせを実施し、常連組の早川さんに『ハナミズキのみち』という児童書を読んでいただいた。

この児童書の作者は、東日本大震災の津波で息子さんを失った後、失意の日々を過ごしていたある日、亡くなられた息子さんの声を聞き、以降、息子さんの好きだったハナミズキの木を植えられる活動を始めた、という内容の本だった。



東北地酒ラインアップ



ホタテ焼き



刺身



早川さんの読み聞かせ・・・ 『ハナミズキのみち』



写真でお伝えする  
東北の風景  
【春と祭り】

写真撮影 尾崎匠

